

日本旧石器学会

ニュースレター 第18号

NEWS LETTER No.18

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION

2011 年度日本旧石器学会総会の開催

2011年6月25日(土)に東京都の首都大学東京1号館110号教室において、第9回目となる2011年度の日本旧石器学会総会が開催された。東日本大震災の影響によるアジア旧石器協会日本大会および現代人的行動シンポジウムの開催延期により、講演会・研究発表・シンポジウム等を伴わない総会となった。

冒頭、事務局より81通の委任状が集まり、出席者25名と合わせて、全会員の5分の1以上に達し、総会が成立したことが報告された。

小野会長の挨拶では、東日本大震災により、アジア旧石器協会および現代人的行動シンポジウムの6月開催の可否が議論され、11月に延期となった経緯が報告された。また、急にも関わらず総会会場を準備してくれた首都大学東京への謝意が示された。次いで会誌『旧石器研究』とニュースレターの定期的刊行の重要性を述べた上で、本総会が学会の進むべき方向を議論する場となることを呼びかけた。

委員会報告・審議は、事務局提案により選出された伊藤健会員を議長として進められた。

総務委員会からは、2011年度に会員のメンバーリストを作成すること、2012年には役員選挙があり、先の役員会により藤波・及川会員が選挙管理委員となったことが報告された。

会計委員会からは2010年度の会計・監査、2011年度の予算報告があった。課題として54人106件(530,000円)に及ぶ未納会費の問題、4年に一度開催されるアジア旧石器協会日本大会経費の積み立ての必要性が提起された。

研究企画委員会からは2012年度の総会・研究発表・シンポジウムについて、先に刊行された日本の旧石器時代遺跡データベースの活用をテーマとして、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所で2012年6月下旬に開催する方向で詳細を定めていくことが報告された。

その後、会誌委員会・データベース委員会・ニュースレター委員会・広報委員会・入会審査委員会・渉外委員会・第4回APA日本大会実行委員会の順で委員会報告が進められた(内容については3ページ以降を参照)。

委員会報告の後に、日本旧石器学会研究グループ内規について、事務局より提案があり、審議がおこなわれた。複数の会員によって組織される自由な研究組織であり、その活動を学会が主導することのない自主的、自律的な研究組織であることが強調された。研究活動予算に10万円を計上する。研究グループは公募制で審査および、補助額の決定は役員会がおこなう。この提案への意見・質疑等は特になく、内規は了承された。(谷記)



写真1 2011年度日本旧石器学会総会 会場

International Symposium

Characteristic features of the Middle to Upper Paleolithic transition in Eurasia: development of culture and evolution of Homo species

山岡拓也 (渉外委員会委嘱委員・研究企画委員会委嘱委員)

アジア旧石器協会とロシア科学アカデミーシベリア支部考古学・民族誌研究室主催の標記の国際シンポジウム（以下国際シンポジウムと略称）が2011年7月4日（月）～7月10日（日）の7日間の日程で、アルタイ山脈デニソワ洞穴遺跡キャンプで開催された。考古学・形質人類学・遺伝学の研究者が各国から参加した。日本からは佐藤宏之、海部陽介両会員が代表として招待され、筆者は追加の招待参加者として参加した。

国際シンポジウムの各発表は7月5日・6日・8日の3日間で行われ、7月4日・7日・9日・10日の4日間はエクスカーションにあてられアルタイ山脈の遺跡見学が実施された。日本からの参加者3名は、7月2日に出発し7月3日夜にデニソワ洞穴遺跡キャンプに到着し、7月4日から国際シンポジウムに参加した。帰国するフライトの都合で国際シンポジウム最終日7月10日のエクスカーションには参加せず、帰国の途に就いた。

国際シンポジウムではデニソワ人をめぐる最新の研究成果や中期旧石器時代から後期旧石器時代への移行をめぐる世界各地での事例研究の成果が発表された。

7月5日はA.P.Derevianko（ロシア科学アカデミー）とS.Pääbo（マックス・プランク研究所）の挨拶と導入に続いて、A.P.DereviankoとM.Shunkov（ロシア科学アカデミー）は、アルタイ山脈における中期旧石器時代から後期旧石器時代への移行の概要を紹介するとともに、世界各地で別々に解剖学的現代人へ進化したとする説を示した。それに続いて、デニソワ人をめぐる形質人類学及び遺伝学に関する諸研究の成果が発表された。S.Pääboによって、遺伝学的な研究から考えられる解剖学的現代人とネアンデルタール人及びデニソワ人との交配やそれらの過程に関する仮説が紹介された。S.Rankin（マックス・プランク研究所）は、最新の発掘成果まで含む、Denisova 洞穴遺跡出土化石人骨の核DNAの解析結果を示した。また、A.P.BuzhilovaやM.B.Mednikova（ともにロシア科学アカデミー）らは、アルタイ山脈の旧石器時代

遺跡から出土している化石人骨の形質人類学の研究成果を報告した。この日の最後にはA.K.Agadjanian（ロシア科学アカデミー）が、デニソワ洞穴のデータに基づく古環境変遷について発表した。

7月6日にはD.Reich（ハーバード大学）やM.Slatkin（カリフォルニア大学）が、人口遺伝学的な分析方法について解説し、それによって近年明らかにされている異なる人類集団間における交配に関する研究成果を発表した。B.Viola（マックス・プランク研究所）はデニソワ人やアルタイ山脈のネアンデルタール人の化石人骨（臼歯）の形態的特徴について発表した。また、A.P.DereviankoとS.Markin（ロシア科学アカデミー）らは、アルタイ山脈における中期旧石器時代石器群に関して発表し、M.V.Dobrovol'skaya（ロシア科学アカデミー）は安定同位体の証拠から明らかにされたアルタイ山脈の後期更新世人類の食性について発表した。その後、L.Meignen（ニース大学）がレバント、J.JaubertやJ-G.Bordes（ともにボルドー第一大学）、F.LeBrun-Ricalens（ルクセンブルク国立博物館）らが南西フランス、M.Bolus（チュービンゲン大学）が南西ドイツの中期旧石器時代から後期旧石器時代への移行に関わる考古学の研究成果について発表した。さらに、I.Kravanić（ザグレブ大学）はクロアチアのVindija 洞穴遺跡の事例を中心に中央ヨーロッパとアドリア海沿岸における移行期の様相について発表し、P.Škradla（チェコ共和国科学アカデミー）はドナウ河中流域におけるボフニシアンの様相について発表した。

発表会の最終日の7月8日には東アジアの国々からの参加者からの発表が組まれた。GaoXing（中国科学アカデミー）は中国における「中期」から後期旧石器時代への移行と、東アジアにおける解剖学的現代人への進化に関する見通しを示した。海部陽介（国立科学博物館）と佐藤宏之（東京大学）は、東南アジアにおける更新世化石人骨の近年の研究成果についてふれ、「デニソワ人」の位置づけに関す



写真2 デニソワ洞穴遺跡キャンプ遠景



写真3 デニソワ洞穴遺跡

る異なる解釈の可能性を示した。筆者は、日本列島における後期旧石器時代初頭石器群の特徴やその意義について発表した。その他に、DuShuisheng（北京師範大学）は中国の、LeeHanyong（全谷先史博物館）、KimKiryong（漢陽大学校）、YooYongwook（忠南大学校）らはそれぞれ韓国の旧石器時代遺跡の最近の調査成果について発表した。

遺跡巡検では、7月4日に Karama 遺跡、Denisova 洞穴遺跡、Okladnikov 洞穴遺跡、7月7日に Kaminnaya 洞穴遺跡、Ust-Karakol 遺跡、Anui-2 遺跡、Anui-3 遺跡、7月9日には Kara-Bom 遺跡、Tiumechin 遺跡を周った。いずれの遺跡でも、M.Shunkov や S.Markin によって、遺跡の自然形成過程、年代、考古資料の内容、古環境などについて丁寧な解説が行われた。これらの遺跡は A.P.Derevianko、M.Shunkov、S.Markin ら

の発表の中で取り上げられた遺跡であり、アルタイ山脈における旧石器時代の主要な遺跡である。7月7日午後には、これらの遺跡出土資料を見学する時間も設けられた。

今回の国際シンポジウムには National Geographic 誌や Science 誌の編集者も参加しており、シンポジウムの様子は National Geographic 誌の映像制作クルーやロシア国内の TV クルーによって撮影されていた。近年のネアンデルタール人やデニソワ人の遺伝学を中心とする諸研究の成果は、ロシア国内はもとより、国際的にも非常に高い関心を集めていることがうかがわれた。今回発表されたデニソワ人をめぐる最新の研究成果は今後、論文として発表されると思われる。こうした、最新の研究成果を発表する場となった国際シンポジウムに参加できたことは、大変貴重な機会であった。

2010 年度委員会報告

総務委員会 2010 年度の総務委員会の活動は以下の通り。

- (1) 2010 年度総会に関する資料の作成・会場設営・連絡調整 (総会：2010 年 6 月 26 日(土) 明治大学)
- (2) 役員会に関する資料の作成・会場設営・連絡調整 (役員会：2010 年 5 月 22 日(土) 国士舘大学世田谷校舎 10 号館 2 階 217 教室)
- (3) 会務に関する連絡・調整
- (4) 会誌(「旧石器研究」6号)、ニュースレター(15・16・17号)、各種学会連絡文書の発送
- (5) 日本考古学協会総会図書交換会等におけるシンポジウム

予稿集及び「旧石器研究」並びに「日本列島の旧石器時代遺跡」の頒布 (図書交換会：2010 年 5 月 23 日(日)、・会誌発送：2010 年 7 月 16 日(金))

- (6) 新入会員の入会・住所変更等に関する事務
- (7) 2011 年度総会会場となる首都大学東京との調整
- (8) 研究グループ支援制度準備会に関する事務
- (9) 第 4 回アジア旧石器協会 (APA) 日本大会に関連する事務

会計委員会

- (1) 会費収入 2010 年度会費の納入状況は、188 人(会員数 242 人)である。未納会費の累計は、54 人 106 件(530,000 円)に達し、学会の運営上問題である。
- (2) その他の収入(刊行物頒布収入) 会誌、シンポジウム予

日本旧石器学会 2010 年度決算内訳

単位：円

収 入					
費 目	予算額	決算額	増 減	摘 要	
1 会費収入					
会費収入	1,570,000	1,160,000	-410,000	06 年度 1 名、07 年度 4 名、08 年度 13 名、09 年度 27 名、10 年度 174 名、11 年度 12 名、12 年度 1 名 (合計 232 件)	
2 その他の収入					
会誌頒布代金	480,000	519,800	39,800	会誌 6 号 62 部、バックナンバー 93 部	
シンポジウム予稿集頒布代金	410,000	353,100	-56,900	予稿集 8 号 155 部、バックナンバー 122 部	
D B 頒布代金	740,000	1,376,200	636,200	会員 59 部、一般 101 部、六一書房 76 部	
雑収入	0	0	0		
前期繰越収支差額	1,488,830	1,488,830	0		
小計①	4,688,830	4,897,930	209,100		
支 出					
費 目	予算総額	決算額	増 減	摘 要	
会議費・会場設営費	80,000	93,316	13,316	総会シンポジウム等会議費、考古学協会図書交換会卓代	
旅費交通費	150,000	34,600	-115,400	総会シンポジウム発表者交通費補助、他	
通信運搬費	250,000	170,309	-79,691	会誌・ニュースレター送料、諸通知、役員間連絡、他	
消耗品費	50,000	11,470	-38,530	事務用品、コピー、他	
印刷製本費	2,436,000	2,352,500	-83,500	会誌、予稿集、D . B .、ニュースレター 3 件	
諸謝金	50,000	0	-50,000		
委託費	63,000	82,925	19,925	HP 立上げ及び管理、翻訳料	
雑費	25,000	22,940	-2,060	雑費(振替、銀行手数料等)	
予備費	1,584,830	0	-1,584,830		
小計②	4,688,830	2,768,060	-1,920,770		
次期繰越金小計①-小計②	0	2,129,870	2,129,870		

稿集は、バックナンバーを含め考古学協会図書交換会・総会及び委託販売によって予算額に近い収入があり、学会運営の資金となっている。DBは、委託販売分に12部の在庫を残すのみであり、収支黒字に大きく寄与した。

(3) 支出 各費目とも概ね予算額の範囲内で執行できた。

(4) 会計監査 2011年5月29日、考古学協会研究発表会場(昼休み)において監査委員により監査を受けた。

研究企画委員会 2010～12年度の研究企画委員会では、刊行された旧石器時代遺跡データベース(『日本列島の旧石器時代』:以下DB)の活用を中心とする活動方針を定めた。2011年度は第4回APA大会のため日本旧石器学会としてのシンポジウムを行なわないことが定まっていたので、2010年度はデータベース委員会とも連携をとりつつ基礎的な検討を行なっている。また委員会としての活用を充実させるために新たに2名の委員を委嘱し、2012年度のシンポジウムの内容について検討を開始した。

会誌委員会 メール会議および、東京在住の委員による意見交換をおこない、2010年度の会誌委員の目標を、(1)学術的水準の高い、刺激的な論考が並ぶ「面白い」誌面にすること、(2)日本考古学協会図書交換会に刊行を間に合わせることを、の2点とした。会員の自由意志に基づく投稿のほか、当該年度シンポジウムの発表者等に投稿を促した。また、編集や査読のプロセスを整理して、マニュアル化することを計画した。(1)については会員諸氏の判断を仰ぎたいが、少なくとも(2)は目標を達成した。

会誌第7号の内容 第7号は、原著論文7、資料紹介1、報告1、および会則・会員名簿等からなる。総頁数は150頁だった。内容は次のとおりである。

【原著論文】 1) 稲田孝司「列島「最古級の石器」とその調査の問題点—長崎県入口・島根県砂原の調査と出土資料—」、2) 佐野勝宏「彫器再考:彫刀面打撃の役割に関する機能論的検討」、3) 岩瀬 彬「杉久保石器群の石器使用痕分析—長野県上原遺跡(第2次・町道地点)の分析を通して—」、4) 和田恵治・佐野恭平「白滝黒曜石の化学組成と微細組織—原産地推定のための地質・岩石資料—」、5) 山田 哲「産地遺跡形成の経済学—フィールド・プロセシング・モデルによる考察—」、6) 長井謙治「前・中期旧石器」時代の石器製作技術—所謂「鈍角剥離」の再検討から—」、7) 中沢祐一「携帯性石刃石器の効用—パッチ利用モデルと石器消費の接点を探る—」

【資料報告】 8) 国武貞克・森本 晋・加藤真二・ジャキン・コジャフメトビッチ・タイマガンベトフ「カザフスタン南部の多層遺跡—チョーカン・バリハノフ遺跡の上部旧石器時代石器群—」

【シンポジウム報告】 9) 阿部 敬「日本旧石器学会 第8回講演・研究発表・シンポジウム「旧石器時代研究の諸問題—列島最古の旧石器を探る—」」

10) 会則・規定関係、役員名簿、会員名簿等

課題 当該年度シンポジウム関係者の投稿は2名だけであった。シンポジウムと会誌の今後の関わり方も含めて整理をすすめてゆきたい。

自由意志に基づく投稿の数がとても少ない。「面白い」誌面を追求することでこの問題を自然に解消することを目指したいが、一方で自由意志に基づく投稿という制度そのものが会員にまだ浸透していないように感じた。制度の普及にも力を入れてゆきたい。

編集委員の便宜と負担軽減のため、編集作業フローと役割分担を明確にし、作業マニュアルの作成をおこなった。今後は編集作業にあまり精通していない者が編集委員になる可能性も考えられる。また、編集作業を主体的に行う地域(今年度は東京)と離れた地域間の委員の効率的な連携が求められる。マニュアルを一層たき上げてゆく必要がある。

投稿規定に今日の学会誌の趨勢や実情にそぐわない点がいくつか見られるようになってきた。投稿規定の改訂を含めた整理・検討を開始したい。

投稿が年明けに集中し、年度末の多忙な時期に会誌委員と査読者に多大な負担を強いられる結果となった。投稿は常時受け付けており、11月までの投稿が望ましいことをニュースレター等でさらに周知徹底していきたい。また、刊行直前の編集作業を主体的に行う地域の会誌委員の負担を軽減するため、この地域の会誌委員の増員を含めた体制の拡充を望む。

データベース委員会 2010年5月に刊行となった『日本列島の旧石器時代遺跡—日本旧石器(先土器・岩宿)時代遺跡のデータベース—』の印刷本については、7月31日までは日本旧石器学会による直接頒布、8月1日以降は予定通り民間の書店に販売を委託しておこない、全ての販売を終えることができた。なお、印刷および配送にかかる経費は、直接頒布を終了した時点ですべて回収できている。

データベース(以下DB)委員会では、DBを構築する過程で生じた問題点の把握と整理につとめ、あわせて今後の活用に向けての検討を進めた。

DBの問題点は項目ごとに多岐にわたるが、データの更新や追加を進めるにあたって、予めこれらの問題に対処し、円滑に進められるようにすることが必要と認識された。とくに、印刷本作成の段階で処理に多くの労力を要することになった遺跡の位置情報(緯度・経度)などの入力について対策を施して入力フォームを更新し、これをもとに各県担当者に刊行済みデータの修正を依頼している。

ニュースレター委員会 ニュースレター第15号、第16号、第17号の編集・発行を行った。主な内容は以下のとおり。

第15号 2010年9月発行 第8回日本旧石器学会の開催(報告)、2009年度委員会報告、2010年度活動計画、2010・2011年度役員会(役員紹介)、関連学会情報(信州黒曜石フォーラム2010・石器文化研究会設立25周年記念シンポジウム)、おしらせ(会費納入のお願い・編集後記)

第16号 2011年2月発行 第3回アジア旧石器協会韓国大会(報告)、第4回アジア旧石器協会(APA)日本大会のお知らせ、フォーラム「世界のなかの神子柴遺跡—氷河時代狩猟民の世界—」(報告)、第27回中・四国旧石器文化談話会報告、第24回東北日本の旧石器文化を語る会秋田大会報告、おしらせ(研究グループ支援制度準備会について・会費納入のお願い・住所変更のお願い・編集後記)

第17号 2011年6月発行 会長声明(東日本大震災に伴

う)、The DUAL SYMPOSIA: シンポジウム「旧石器時代のアジアにおける現代人的行動の出現と多様性」及び第4回アジア旧石器協会 (APA) 日本大会延期のお知らせ、2011年度日本旧石器学会総会のお知らせ、日本における更新世人類研究の現状と課題—沖縄県石垣市白保竿根田原洞穴遺跡の発掘調査から— (報告)、石器文化研究会設立25周年記念第5回シンポジウム「ナイフ形石器・ナイフ形石器文化とは何か—概念と実態を問い直す—」開催報告、第36回九州旧石器文化研究会熊本大会「ナイフ形石器群の変遷と地域性—九州における重層遺跡の検討—」開催報告、お知らせ (会費納入のお願い・住所変更のお願い・編集後記)

広報委員会 広報委員会では、「社会科教科書問題」の事例対応の一環として小学生対象のワークショップ、旧石器時代を広く知っていただくための一般講演会、HP作成・管理などに基づいた広報活動を主として行った。詳細は以下のとおりである。

教科書問題については、子どもたちに教科書に載っていない旧石器時代のことをよく理解してもらうため、黒曜石を用いた旧石器製作と使用のワークショップを、長野県伊那市創造館で2010年8月1日に実施した。夏休み中の小学生24名の参加があった。また、同日・同館においてフォーラム「世界の中の神子柴遺跡—氷河時代の狩猟採集民の世界—」が開催され、小野昭会長・春成秀爾会員・堤隆広報委員長がパネリストとなって議論がなされた。神子柴遺跡の石器全点の展示のもと、120名の一般参加者があった。

HPについては、学会活動報告、関連情報、趣旨、組織、会則、入会案内などを示したコンテンツを作成し、適宜公開した。また、新たに「日本列島の旧石器時代遺跡」というコンテンツを立ち上げ、列島を代表する8遺跡の紹介がなされ、継続して紹介がなされる予定である。

入会審査委員会 会則・運営細則にもとづき「論文・研究ノート・調査報告等を公表した者」という基準により、入会審査を行った。2010年度 (2010年4月1日～2011年3月31日) の新入会員は以下の11名の方々である (敬称略・都道府県別)。

中沢祐一 (北海道)、和田恵治 (北海道)、佐野勝宏 (宮城県)、大塚宣明 (茨城県)、尾田識好 (東京都)、佐藤孝雄 (神奈川県)、杉原保幸 (長野県)、荻幸二 (大分県)、両宮瑞生 (鹿児島県)、重留康宏 (鹿児島県)、山崎真治 (沖縄県)

渉外委員会 APAに関する渉外・連絡・調整・準備を行った。

(1) 2010年度APA韓国大会 (10月) へ小野昭 (Full)・麻柄一志・島田和夫・諏訪間順・鈴木美保・出穂雅実・野口淳・佐藤宏之・阿子島香・吉川耕太郎 (以上 partial) 10名を代表として派遣し、その連絡・調整を行った。

(2) 2011年度APA日本大会の実行委員会を立ち上げ、本格的な準備を開始した。実行委員: 小野昭・諏訪間順・鈴木美保・野口淳・宮田栄二・佐藤宏之・阿子島香・出穂雅実・門脇誠二・山岡拓也

(3) APA日本大会開催準備のため、渉外委員として、門脇誠二・山岡拓也両会員を委嘱した。

第4回APA日本大会実行委員会 第4回APA日本大会実行委員会は2010年6月総会時に前年度渉外委員会を中心とし

た準備委員会を引き継ぎ、小野昭会長を実行委員長とし渉外委員・総務委員・研究企画委員を中心に、総勢11名で組織された。

10年度前半は実行委員会の中でも実行委員長、渉外委員を中心とするメンバーで、共同開催する科学博物館との間でスケジュールの調整、事務的な協議などを中心とした活動が行われた。

10月10日～16日開催された第3回韓国大会には小野昭、佐藤宏之、阿子島香、出穂雅実、諏訪間順、野口淳、鈴木美保の実行委員が日本代表メンバーとして参加し、APA各国へ2011年度大会の日程や概要の告知を行い、また、大会中、実行委員で協議の時間をもち、事務局長の選出および、日本大会までの活動スケジュールの打ち合わせ等を行い本格的な活動を開始した。以後の経過は以下の通りである。

11月26日: 国立科学博物館にてAPA大会実行委員の代表と科学博物館側との打ち合わせ。サーキュラーの作成が進められ、それに必要な大会全体の概要について、具体案が検討された。また、科博側の代表として海部陽介会員も実行委員会に加わってもらうこととなった。

12月21日: 明治大学博物館会議室にて、上記科博との協議を踏まえ、島田和夫旧石器学会総務委員長も交えて、第1回実行委員会が開催された。主として、大会までの詳細が入ったサーキュラーの確定、および、巡検、展示、プログラムなど実行委員の役割分担が決められた。

委員会後、年末年始にかけて完成したサーキュラーのAPA各国代表への送信、科博、旧石器学会HPへのアップ、日本考古学協会、日本第四紀研究会、日本人類学会等関連学会への後援依頼、また、2011年2月7日には委員長以下、巡検担当の委員3名が巡検予定地沼津市を協力依頼の挨拶に訪問した。

2011年3月19日: 3月31日の参加登録締め切りを前に第2回の実行委員会が予定されていたところ、11日に東日本大震災が発生した。原発事故の程度について不確定な要素が多かったため、海外参加者への影響が懸念されたので、延期も視野に入れながらも予定通り6月開催の方向で準備を進めることが確認され、登録が出揃った4月10日に第3回実行委員会の開催し、改めて6月開催について検討することになった。

会議後第3回実行委員会までの間に委員各位がそれぞれ担当の仕事について予定通り開催と延期の両面について、調査を行いメールで情報の交換が行われた。

4月10日: 科博にて第3回実行委員会が開催され、11月26日～12月1日への延期が決定された。同時に延期通知の作成、APA各国代表、参加登録者、後援諸機関への連絡、旧石器学会員への通知の段取り、新日程での準備スケジュールが検討された。

現在延期になったために変更を余儀なくされる事項について、各担当委員が継続調査とメールによる情報交換を行ない、新日程での開催に向けて準備を行なっている。

2011 年度活動計画

総務委員会 以下の活動を計画している。(1) 会務に関する連絡・調整、(2) 会員メーリングリストの構築、(3) 会誌・ニュースレターの発送、(4) 第4回 APA 日本大会開催に関する事務、(5) 2012 年度役員選挙に関する事務

会計委員会

(1) 会費収入 例年どおり会員数の会費と未納分について計上した。予算額と決算額の乖離が年々大きくなっており、会費未納会員への納入督促が必要と考えられる。

(2) その他の収入 (刊行物頒布収入) 例年に比べて直接頒布の機会が少ないこと、会誌を除いて一般頒布の刊行物がないため、大幅に少なく計上した。

(3) 支出 新たな費目として、アジア旧石器協会日本大会経費、研究グループ運営経費及び 2012 年度シンポジウム開催準備費を計上した。印刷製本費は、シンポジウムの開催がなく予稿集の印刷がないため減額した。他の各費目は、前年度の実績を参考として所要額を計上した。

(4) 今後の課題 アジア旧石器協会日本大会を 4 年サイクルで開催するのであれば、毎年度一定の金額を積立てて開催費用を確保することを検討する必要がある。

研究企画委員会 引き続き 2012 年度のシンポジウムの内容について、詳細を検討する。そのための事前検討会の開催を

予定している。なお 2012 年度の総会・研究発表・シンポジウムについては、独立行政法人文化財研究機構奈良文化財研究所を会場として開催することを打診し内諾を得ている。今後、同研究所所属の学会を中心とする実行組織により開催準備を進めていただき、研究企画委員会としては、研究発表・シンポジウムの内容について詳細を定めていく予定である。

会誌委員会 山積みする課題への取り組みを着実にここない、さらに充実した第 8 号の刊行を実現したい。以下の 3 点を 2011 年度の主な活動計画としたい。(1) 学術的水準の高い論考が並ぶ、より「面白い」誌面になるよう積極的に活動を行う。(2) 第 8 号の刊行を 2012 年日本考古学協会図書交換会に間に合わせる。(3) 投稿規定の改定を視野に入れた問題点の整理を行う。

データベース委員会 次の (1)～(3) を活動計画とする。(1) 各県からの刊行済みデータの修正を集約し、必要に応じて日本旧石器学会のホームページに掲載する。(2) 引き続き、今後のデータの修正・追加を含めた DB の保守およびオンライン公開に向けての検討をおこなう。(3) 研究企画委員会との連携のもと、DB 活用の可能性を検討する。

ニュースレター委員会 ニュースレター第 18 号、第 19 号、第 20 号の編集・発行を行う。主な内容は以下のとおり。

第 18 号 2011 年 8 月発行 第 9 回日本旧石器学会の開催(報告)、2010 年度委員会報告、2011 年度活動計画、2010 年度国内調査研究動向、おしらせ

第 19 号 2011 年 12 月発行 第 4 回アジア旧石器協会日

日本旧石器学会 2011 年度予算内訳

単位：円

		収 入				
費 目	予算額	前年度予算額	増 減	摘 要		
1 会費収入						
会費収入	1,665,000	1,570,000	95,000	(前納者 15 名を除く会員 227 名) × 5,000 円、(遡及分延べ 106 名) × 5,000 円		
2 その他の収入						
会誌頒布代金	320,000	480,000	-160,000	33 部 * 4000 円 = 132,000 円、バックナンバー及び委託販売分 188,000 円		
シンポジウム予稿集頒布代金	150,000	410,000	-260,000	バックナンバー及び委託販売分 150,000 円		
D B 頒布代金	62,400	740,000	-677,600	委託販売分 62,400 円 (6,500*08*12)		
前期繰越収支差額	2,129,870	1,488,830	641,040			
小計①	4,327,270	4,688,830	-361,560			
		支 出				
費 目	予算額	前年度予算額	増 減	摘 要		
会議費・会場設営費	50,000	80,000	-30,000	役員会会議費、総会会場設営費、他		
旅費交通費	100,000	150,000	-50,000	役員会旅費補助、国際会議旅費補助、他		
通信運搬費	200,000	250,000	-50,000	会誌・ニュースレター送料、諸通知、役員間連絡、校正連絡、他		
消耗品費	50,000	50,000	0	事務用品、コピー、他		
印刷製本費	750,000	2,436,000	-1,686,000	会誌、ニュースレター 3 通、他		
諸謝金	30,000	50,000	-20,000	臨時事務補助謝金、他		
委託費	63,000	63,000	0	H. P. 管理委託		
☆ アジア旧石器協会日本大会経費	800,000	0	800,000			
☆ 研究グループ運営経費	100,000	0	100,000			
☆ 2012 年度シンポジウム開催準備費	110,000	0	110,000	実行組織会議費、事前検討会経費、他		
雑費	25,000	25,000	0	雑費 (郵便振替及び銀行振込手数料他)		
予備費	2,049,270	1,584,830	464,440	予備費、他		
小計②	4,327,270	4,688,830	-361,560			
小計①-小計②	0	0	0			

本大会（報告）、委員会活動中間報告、関連学会情報、お知らせ

第20号 2012年4月発行 関連学会の研究の現状と課題、2011年度国内調査研究動向、関連学会情報、お知らせ

広報委員会 日本旧石器学会や旧石器時代の周知・PR、教科書問題への取り組み、HPの更新や魅力あるコンテンツの作成を柱に、以下のとおり活動を行う。(1)一般講演会を開催し、日本旧石器学会や旧石器時代の周知・PRに努める。(2)子ども向けのワークショップなどの開催により旧石器時代の周知に努める。(3)教科書問題の対応として、子ども向けのコンテンツを作成し、旧石器時代がどんな時代かを解説する。(4)HPでは、単に情報提供だけでなく、「日本列島の旧石器時代遺跡」など読めるページの充実をはかる。

入会審査委員会 引き続き新入会員の審査を行う。

渉外委員会 APAに関する渉外・連絡・調整・準備等が主たる活動となる。また各国から送付される学会・シンポジウム等の諸連絡の調整を行う。(1)東日本大震災の影響で、APA日本大会が6月から11月末～12月初頭に延期されたので、引き続きその連絡・調整等の準備を行う。(2)次回のAPAは、ロシア・クラスノヤルスクで来年7月前半開催の予定であるので、そのための連絡・調整等を行う。

日本旧石器学会

研究グループ内規について

1. 内規制定の目的について

ニュースレターでお知らせしました通り、本学会では「研究グループ支援制度準備会」を設置し、学会員相互の研究交流を促進することを目的に、本学会に「研究グループ」を置くことができる内規を検討してきました。「研究グループ」は、複数の学会員によって組織される自由な研究組織と位置づけられます。また、内規には、本学会の年度予算が許容する一定の範囲内で「研究グループ」の運営費を補助することも盛り込まれています。なお、「研究グループ」の活動を学会が主導することはありません。あくまで、会員の皆様の自主的・自律的な研究組織です。

2. 内規の運用について

「研究グループ」は公募制とします。詳細は次項「日本旧石器学会研究グループ内規」を参照してください。ただし2011年度については、内規の総会承認後（2011年6月25日）、本学会ホームページ等にて周知して公募を開始し、2011年9月末から10月初旬までに制度の運用を開始します。一方、2012年度の公募期間は2012年3月～4月をめどに、審査は2012年度日本考古学協会での本学会役員会となる見込みです。

3. 運営費の補助について

本学会が「研究グループ」に補助する運営費の原資には、当面の間、年度予算のうち10万円程度を経常的にあてる予定です。補助する運営費の金額は、アクティブな「研究グループ」の数も考慮して、1グループあたり3～4万円程度が見込まれます。補助額はそのつど役員会が決定することになります。

日本旧石器学会研究グループ内規

1. 日本旧石器学会（以下、本学会とする。）は、会則第3条にもとづき、会員相互の交流と研究活動の推進に資するべく、研究グループを置くことができる。

2. 研究グループは、本学会の会員から構成されるものとし、旧石器考古学およびこれに関連する研究課題について、国内・国外の情報を交換し研究を推進することを目的とする。

3. 本学会は、財政的に可能な範囲内で、研究グループの目的を推進するために、研究グループの運営費を3カ年を限度として交付することができる。

4. 第3条に規定する運営費の配分額は、年度ごとに別途算定し、年度予算の総会承認を得て交付する。

5. 研究グループは、3名以上の会員からの申し出にもとづいて、総務委員会から役員会に提案され、役員会の承認を得て設置される。

6. 研究グループの発足を希望する会員は、グループ名、代表者名、連絡先、研究目的、活動予定期間、参加者数、運営費交付希望の有無などを文書で本学会事務局に申し出なければならない。

7. 研究グループが運営費の交付を受けて活動する期間は当面3カ年とするが、4年次以降も運営費の交付を受けずに活動期間を延長することができる。

8. 研究グループは、活動記録などを会報「ニュースレター」および本学会ホームページ等に掲載することとし、研究集会は会員に公開することを原則とする。

9. 研究グループの代表者は、活動報告および運営費の決算ならびに次年度における活動継続の有無などを、各年度末までに本学会事務局をとおして、役員会に文書により提出しなければならない。

10. 本学会は、研究グループの運営には関与せず、当該研究グループの代表者に一任する。

11. 研究グループは、この内規により対応できない事柄について、役員会と別途協議することができる。

以上

2011年度役員会

会長：小野 昭（APA副会長）、副会長：麻柄一志、総務：*島田和高・諏訪問順（兼）・鈴木美保、ニュースレター：*谷 和隆・山原敏朗・沖 憲明、会誌：*出穂雅実・亀田直美・吉川耕太郎・門脇誠二（委嘱）・岩瀬 彬（委嘱）・中村紀雄（委嘱）、研究企画：*野口 淳 宮田栄二 諏訪問順（兼）・山岡拓也（委嘱）・芝康次郎（委嘱）・森先一貴（委嘱）・近藤康久（委嘱）、渉外：*佐藤宏之（APA執行委員）・加藤真二（APA執行委員）・阿子島香・出穂雅実（兼）・門脇誠二（委嘱）・山岡拓也（委嘱）、データベース：*小菅将夫・光石鳴巳・藤波啓容（委嘱）、会計：*鈴木次郎・栗原伸好（委嘱）、入会審査：*諏訪問順・島田和高（兼）・広報：*堤 隆・西井幸雄・加藤勝仁、会計監査：荒井幹夫・御堂島正、顧問：赤羽貞幸、選挙管理委員会：藤波啓容・及川 稔（*は委員長）

関連学会情報

第37回九州旧石器文化研究会大分大会「九州地方における三稜尖頭器の製作技術と石器石材について」

会場：別府大学 18号館（記念館）

第1日目 10月1日（土）13:00～17:00 講演：「南九州地方の旧石器編年研究に関するテフラ研究の現状と課題」早田 勉、「関東地方の角錐状石器について」亀田直美、研究発表：「石材ごとの製作技術」①、「祖母・傾山系産流紋岩製角錐状石器の製作技術」宮田 剛、「宮崎平野部の角錐状石器製作」秋成雅博

第2日目 10月2日（日）9:15～13:00 研究発表：「石材ごとの製作技術」②、「中九州における角錐状石器の製作技術について」越知睦和、「南九州における角錐状石器の製作技術について」馬籠亮道・赤井文人、「西北九州の黒曜石製角錐状石器」杉原敏之、討論：司会：荻幸二、資料見学会、誌上発表あり、申し込みは palaeo@live.jp（宮田剛）まで

第28回中・四国旧石器文化談話会「高知県における旧石器文化の様相」

会場：高知県立埋蔵文化財センター研修室（高知県南国市）

第1日目 10月8日（土）13:30～17:00 調査事例報告：「広島県内における近年の発掘調査事例」沖 憲明、報告：「高知県の旧石器文化研究と木村剛朗氏」森田尚宏、遺物見学（奥谷南遺跡、新改西谷遺跡、ナシケ森遺跡、木村剛朗寄贈資料）、基調報告：「南四国における後半期石器群の様相」松村信博、「高知県のナイフ形石器文化」氏家敏之、各県近況報告（※18:00～懇親会 高知市内を予定）

第2日目 10月9日（日）9:30～11:50 基調報告：「南四国の細石刃文化」多田 仁、「九州と南四国の細石刃文化」松本 茂、遺物見学、質疑・討論
費用：参加費1,000円程度、懇親会費6,000円程度を予定
参加申込：9月22日（木）までに、〒783-0006 高知県南国市篠原南泉1473-1（財）高知県文化財埋蔵文化財センター 森田尚宏（TEL088-864-0671、FAX088-864-1423、naohiro_morita@ken2.pref.kochi.lg.jp）まで

信州黒曜石フォーラム2011「黒曜石の一括埋納は何を物語るのか」（第一報）

主催：信州黒曜石フォーラム実行委員会 2011年10月22日（土）10:00～ 会場：尖石縄文考古館 基調講演「縄文時代における黒曜石のデポ」田中英司、事例報告①「霧ヶ峰南麓・ハケ岳西麓に於ける黒曜石一括埋納について」守矢昌文、②「一括埋納例 原村の遺跡から」平出一治、③「岡谷市の黒曜石一括埋納例について」会田 進、コメント①「星箕峠黒曜石採掘址と近接地における原石利用の様相」大竹幸恵、②「山梨県の黒曜石一括埋納について」村松佳幸、③「弥生時代中部高地における黒曜石の集積出土について」馬場伸一郎、討論 ※詳細は黒曜石研究センターホームページをご覧ください。

お知らせ

『旧石器研究』原稿募集について

会誌『旧石器研究』第8号の原稿を募集しております。投稿を希望される会員は会誌第7号の末尾に掲載している投稿規程および執筆要項に従ってご投稿ください。編集の都合上、投稿希望者は執筆者氏名および仮のタイトルを予めご連絡願います。

なお『旧石器研究』第8号の刊行は2012年5月を予定しております。投稿希望者は2011年11月末日までにご投稿ください。会員の皆様からの投稿をお待ちしております。連絡・問い合わせ先：〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1 首都大学東京人文・社会系考古学研究室 出穂雅実気付 日本旧石器学会会誌委員会 Email: izuhom@tmu.ac.jp

第4回アジア旧石器協会（APA） 日本大会の参加登録について

11月26日（土）～12月1日（木）に延期となった標記の大会に参加される方は、参加登録をお願いします。登録されない場合、当日会場に入れないことがあります。登録・問い合わせ先はシンポジウム事務局M&Jインターナショナル新川順子気付 〒241-0817 神奈川県横浜市旭区今宿1-35-17、FAX045-361-9681、Mail:junko_nikkawa@99.catv-yokohama.ne.jp

会費納入のお願い

日頃より日本旧石器学会の運営につきまして御理解、御協力をいただき、ありがとうございます。日本旧石器学会では会費は前納を原則として運営をさせていただいております。会費未納の方々につきましては、速やかに所定の会費の支払い手続きをなされますようお願い申し上げます。年会費5,000円で、振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。

日本旧石器学会ニュースレター

第18号

2011年8月31日発行

編集：日本旧石器学会ニュースレター委員会

谷和隆・山原敏朗・沖憲明

発行：日本旧石器学会

事務局：明治大学博物館 島田和高

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

アカデミーコモン地階 電話：03-3296-4431

E-mail ma96018@mics.meiji.ac.jp

HP <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jpra/index.htm>